

# 日本結核病学会東海支部学会

## —— 第131回総会演説抄録 ——

平成30年5月26・27日 於 名古屋市中小企業振興会館（名古屋市）

（第113回日本呼吸器学会東海地方学会  
第16回日本サルコイドーシス/肉芽腫  
性疾患学会中部支部会 と合同開催）

会 長 山 本 雅 史（名古屋掖済会病院呼吸器内科）

### —— 一 般 演 題 ——

#### 1. 肺癌治療に特定食品が寄与した1例 °寺田正樹 （大久伝内科）

65歳男性。サービス業。毎年健康診断を受けていたが、200X年、肺癌を疑われ、某病院を紹介された。肺腺癌、病期ⅢBと診断され、化学療法・放射線療法が選択された。治療中の副作用は、食欲低下等、全くなく、第1クールから第4クールまでを約3カ月で終了した。退院前、その後の2カ月ごとの画像診断では、放射線肺臓炎は見られたが、リンパ節転移、腫瘍陰影等は認められなかった。男性は、病変の指摘以前から当院の「健康に対する特定食品の効能を検証するための治験」に参加しており、著明改善の一因と思われた。今後は治療選択の一つとして有用である。

#### 2. 来院時心肺停止で突然死した肺結核：死後CTと病理解剖より診断に至った1例 °矢口大三・木村隼大・井上徳子・小林大祐・志津匡人・今井直幸・市川元司（岐阜県立多治見病呼吸器内）渡辺和子（同病理診断）

結核の管理中に大量喀血を合併し、窒息による突然死は少なからず経験する。しかしながら、結核未確診の患者に結核性の大量気道内出血が起こった場合で、外観上その痕跡に乏しい場合は、結核性の気道内出血による気道閉塞が死因であると即座に同定することは困難である。今回われわれは、20代時に結核治療歴のある83歳日本人女性が、来院時心肺停止（Cardiopulmonary arrest on

arrival, CPAOA）状態で、当初死因が同定できず、死後画像並びに病理解剖により、結核性の大量気道内出血による気道閉塞により突然死した症例を経験したので報告する。死因を同定できたことにより、その後の接触者検診を積極的に進めることができ、結核の二次感染予防につなげることが可能となった。

#### 3. 中耳結核の1例 °木村隼大・井上徳子・小林大祐・矢口大三・志津匡人・今井直幸・市川元司（岐阜県立多治見病呼吸器内）

症例は78歳男性。平成29年4月より左鼻の違和感を主訴に近医耳鼻科受診、精査の結果、軽度の感音性難聴を伴う左中耳炎として治療されていたが改善乏しく、左顔面神経麻痺、鼓膜穿孔も認めた。難治性の経過から結核性中耳炎を疑い耳漏の抗酸菌検査を施行したところ、抗酸菌培養陽性、PCRで結核菌群陽性にて、中耳結核の診断となった。肺結核合併の検索目的に前医に紹介され、喀痰抗酸菌塗抹陽性、PCRで結核菌群陽性となり肺結核合併の診断に至り、平成30年1月、治療目的にて結核病棟のある当院に紹介入院となった。入院後、CTでは左内耳に液体貯留を認め、初期の結核性中耳炎として矛盾しない所見であった。HREZによる治療開始約2カ月後に排菌陰性となったため退院し、現在も外来で治療を継続している。中耳結核は本邦でも報告例の少ない稀な疾患であり、文献的考察を加えて報告する。

